

松本清張全集 45

松本清張全集

45

松本清張全集45

棲息分布・中央流沙

定価 1800円

1983年2月25日第1刷

著者

© 松本清張

発行者

西永達夫

発行所

株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23

電話(代表)03-265・1211

印刷所

凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

0393-508070-7384

棲息分布

3

中央流沙

321

解説 山田宗睦

445

装帧 伊藤 憲治

棲息分布

会長の楽しい死

東洋鉄鋼株式会社会長の菅沼丑平の死際は、その生涯にふさわしく華麗なものであった。人間の死はよくその生涯の経歴と照応されるが、彼こそはまさにその適例であった。菅沼丑平は、七十四歳の生涯の前半で、ほとんど無一物から財をなす基礎をきずいた。それが大成したのは、鉄鋼界が戦後急速に発展してからである。

本来の東洋鉄鋼株式会社を中心に附帯事業が葡萄状球菌のように無限に重なりついた。

傘下の会社はそれぞれ独立採算制だったが、それらを統轄して東洋鉄鋼グループと銘を打った。むろん、そこまで発達する途上では彼はあくどいことをした。たとえば、彼の事業は、当然、その先々で利害の衝突する他の既存会社とのトラブルが起る。彼は強引にそれらを買収し、ときには謀略で強奪した。

世間からコンツェルンという大そうな名が菅沼の主宰する事業に与えられた。しかし、旧財閥と違って、この新興コンツェルンの主は、それだけの財力を擁しても決して鷹揚に構えるようなことはなかった。相変らずのあくどいやりかたは、世間の非難をうけたが、丑平はそんな評判など齒牙にもかけなかった。

棲息分布

菅沼丑平は、一度政党内にすすめられて或る大臣の椅子

に就いたことがあった。だが、いっぺんで彼はそれを放棄した。政治家がいかに彼の財産を食い荒そうとしているかが分って怖気をふるったのである。

戦国時代の武将のように、群小鉄鋼界に切取り勝手次第の横行をほしきままにした菅沼丑平も、ようやく前途に限界をみるようになった。七十歳だった。

一つは、やはり、時勢で、これ以上切取るべき余地がなくなってしまったことである。それだけ産業の秩序が整って新しい野心が伸ばせなくなったのだった。その事業が飽和状態になると、彼は急に年齢の衰えを感じるようになった。企業はそれぞれの腹心に任せてすべてうまく行っている。彼は社長の椅子を俸の幸一に譲り、会長の地位に退いた。

しかし、彼は決して隠居ではなかった。息子の社長といえども彼の権限をそっくり譲られたのではない。伴をはじめ、股肱の臣にあたる関係事業の社長連は毎週一回は早朝に、彼の田園調布の邸に集合し、その指示をうけなければならなかった。いわゆる大御所政治であった。

彼は全くの独裁者だった。傘下の各会社の社長も彼の眼には小僧でしかなく、朝飯会では彼の罵声が容赦なく飛んだ。

「ばか。そんなことで社長がつとまるか。この腑抜け者が！」

その声も七十をすぎると次第に弱まりをみせてきた。七

十二歳になると、その朝飯会を開くのが彼に辛くなってきた。しかし、意気は一向に衰えなかった。

老衰が彼の身体に進行していた。その年の春、彼は軽い脳軟化症に罹って、右の手足が不自由となった。だが、氣持は少しも前と変わらず、舌をもつらせながらも社長連中を頭から怒鳴りつけた。不自由な歩行を人に助けられてはこまめに関連事業の状態を車で見て回った。彼の車の座席半分は寝台車のように特別に設計されていた。

彼の最後の氣力を何が支えていたか。

女であった。――

菅沼丑平は、女なしにはほとんど一晩も寝られなかった。四十五歳のとき、彼には七人の妾がいたが、現在では、そのうち一人か二人くらいしか彼には用がない。つまり、ほとんどの女たちが年を取りすぎてしまったのである。未だに彼の世話をしているのは、若くて五十一歳と五十三歳の女だった。

もちろん、用はなくなっても他の女にはそれぞれ立派な家を与え、会社の総務部から仕送りをさせた。そういう金は一切会社経費で落していたから、彼の個人的な財布からは一文も出ることはなかった。女たちのための「担当」重役がいた。

七十近くまで女なしにはひとりで床に入れなかった彼も、脳軟化症に罹ってからは完全に女たちを指先の玩弄物にした。彼は、いつも若い女を五、六人ぐらい雑魚寝させ、彼

はその真ん中に挟まった。これが自分の長命の秘訣だと、隠するところなく他人に吹聴した。若い女たちは、べつに彼から特殊な寵愛をうけるわけではないので、それほどいやがらずに雑魚寝に加わった。芸妓が多かった。

そのような遊びかたをしても、事業には相変わらず鋭い眼光をゆき互らせていた。彼が本社の会長室に出なくなつてからは、自邸の応接室が首脳部の会議室となった。

そんなとき丑平は女たちに支えられ、足を曳きずつて応接室に出てゆき、会議が終ると、女たちの待っている病室に戻った。

だから、他の社長連や重役たちは、閉まった襖の向うから彼を迎える女たちの嬌声が聞えても、それほどには氣にはならなかった。かえって会長の長寿を喜んだのだった。

その年の一月下旬、菅沼丑平は伊豆伊東の別荘に行った。

海と街を眼下に見る高台の中腹にあって、街のどのような一級旅館でも及ばないくらいの設備をその別荘は持っていた。たとえば、浴室だが、普通の別荘だと、せいぜい四人も入れればいいになる。彼の別荘の浴場は、温泉旅館にあるのと同じくらいばかり広い広さだった。

浴室だけ別棟になっていたので、その広さは三十人くらい一時に入ってもそれほど混雑はしないくらいだった。

その設計のとき、社員たちの保養に提供するのだという

ふれこみだったが、出来上がってしまつてからは、ときたま伺候する数人の重役に使用が許される程度だった。浴槽の真ん中には大理石の円柱が立ち、曲線形につくられた湯槽には絶えず満々と湯が張つてタイル張りの床にこぼれ落ちていた。円柱は湯気で霞んだが、その影は湯の中に典雅に映り、仏像を置いた遠い室の端は暖かい霧でかたちがわからないくらいだった。

そのとき丑平は、東京から十人ばかりの女をつれて行つていた。

「みんないっしょに風呂に入れ」

と、彼は命令した。

女たちは東京の花柳界一流地の芸者で、その総帥は丑平がいつもひいきにしている或る料亭のおかみだった。

「会長さんは、あつちのほうはもう駄目だから心配することはないよ。まるで大きな子供と風呂に入っているようなものだよ」

と、おかみは若い芸者たちに言い聞かせた。安全なことは分っているのに、彼女たちは花代をつけてもらつて嬉々として混浴に参加した。

こういうときの丑平は上機嫌であった。

「おれもこの通り素っ裸でどこも隠しはせんから、おまえたちも前をかくすな」

と、彼は言った。

「あら、いやだ」

と、女たちは声をあげたが、その半数は四十を越した女だった。彼女らは踊りか長唄か三味線の名取ばかりで、いづれも姐さん株だった。若い芸妓には睨みが利く。

「ほんとだよ。会長さんはもう男ではないんだから、恥しがることはないよ」

と、彼女たちは若い芸妓たちに言った。

丑平は、そうした女たちの間を子供のようにはぞろぞろと回つた。彼の卑猥な言葉も、男を喪失してからはいやらしくは聞えず、即物的な言葉としか感じられなかった。

湯槽から上がると、彼はマットを敷いたタイルの床の上になんと仰向けに寝そべった。

女たちは丑平の上に寄つてたかつて、頭、肩、手、胸、また脚と、それぞれが部分を受持つてマッサージをした。彼は、いよいよ満足そうな顔をし、うっとり眼を閉じる。老人は、わざと若い妓に自分の太腿や下腹を受持たせた。

「いやだわ、お姐さん」

と、若い妓は顔を赧くするが、

「会長さんは、そういうところは若いひとでないとお気に入らないから、やんなさいよ」

と年上の妓が命じた。

丑平は、艶々した若い妓の白い皮膚に眼を細めながら、あらわな股間を誇示した。

「そんな遠いところばかり揉んでおつてはどうもならん。もっとソコの近くを揉まんかい」

と、会長は若い妓に催促した。

どのように揉^もんでも、丑平のしなびた身体の股のあたりにはいささかの變化も起^{おこ}らなかった。

「男も、こんなふうになっては愉^{たの}しみがないわね」

と、女同士でささやくと、丑平がそれを耳に入れて、かつと眼をあけた。

「何を言うとする。おれはいままでさんざん道楽をしてきて、その上、こうしておまえたちにサービスをさせとする。こんな満足があらうか。どんな極楽に行っても、こんなええ目には遭^あえんぞ」

「ほんとにそうですね、会長さん。でも、神様は人間の生命だけを延ばしておいて、どうしてあつちのほうを途中で枯^からしてしまうんでしょうか？ 会長さんだって元気な身体なのに、ここのだけ役に立たないなんて、神様も不公平だわね」

とその衰弱を見ながら言うのと、

「うむ、そこがいつまでも生きていたら、若いものに迷惑をかけるからな」

と、丑平はいかつい顔をニヤリと笑わせた。

マッサージは長い。女たちは湯桶に湯を汲んできてはときどき彼の身体の上にかけた。この湯のかけ方もあんまり急激ではないけず、おもむろにすぎても機嫌が悪い。その辺の呼吸はすべてひいきのおかみが指図した。

今日もいつもの行事であったから、そのおかみも丑平が

うっとりとした顔をしていたのを心地よいあまりだと思っていた。

ようやく十人の女によるマッサージが済むと、丑平は静かにおかみによって頭から抱え上げられた。いつもは、

「おう」

と気軽に背中を起す丑平だったが、そのときはぐったりとなつて、容易に動かなかつた。睡眠に落ち、軀^{からだ}が出ていた。

「会長さん、さあ、もう一風呂浴びて上がりましょう」

丑平の返事はなかつた。初めて様子が変だと気がついた。

「会長さん、会長さん」

呼び立てると、かすかな呻^{うな}きが丑平の口から洩れたが、それだけでも普通でない声と分った。女たちは動転した。

「だれか、すぐ上がって報らせておくれ」

と、おかみが叫んだ。

奇怪な場面である。老人が衰えた恥部をさらして寝ているその周囲を、豊饒^{ほうじょう}な裸の女たちがあわてふためいて騒動していた。女たちがうろたえたのは、だれかがここに駆けつけてくる前に、早いとこ身体をかくさなければならぬことだった。彼女たちは、まず、自分のために右往左往した。

菅沼丑平は意識不明のまま男たちに抱えられて病室に運ばれた。

土地の医者がすぐに呼ばれた。不覚なことである。いつ

もは旅行先に主治医と看護婦が付いてくるのに、このときばかりは看護婦も来てなかった。おそらく、別荘行というのきな遊びが旅という觀念を失わせたのであろう。土地の医者には応急手当もろくに出来なかった。

これは医者いしやの技術が下手というわけではなく、天下の菅沼丑平の危篤に立会たひあひわされて気が顛倒てんどうしたのかも分らなかつた。

東京の本邸や、主治医の家や、各系列会社の社長、役員たちに電話がかけられた。別荘のぶんだけでは間に合わず、使用人が近所の家の電話を借りに走り回った。

菅沼丑平は大肝おほきんをかいて太平楽たいへいらくに寝ていた。料亭のおかみや、年配の芸妓たちが臨時の看護婦になった。しかし、当人は痛いも痒かゆいも慇うれえない。遠雷に似た肝はかなり離れたところまで聞えた。

若い芸者たちはただおろおろするだけだった。

「あんたたちは一応婦人なさい」
おかみに言われて、みんな這々ははの体で東京に逃げ帰った。おかみの指図は、やがて到着する家族や社長連の眼を憚おそったのだった。

三時間ほどして、息子の幸一が主治医とほかの医者二人をつれて駆けつけてきた。他の社長、重役も、それに続々とつづいた。

菅沼丑平の病室は近親者だけが見まもり、その他の側近は近くの間に陣取った。もはや、だれが見ても菅沼丑平の

死は時間の問題だと思われた。

社長や重役の中にも出張やその他の用事で不在のものがあつた。急報をうけて即刻駆けつけた者は、その半数にも満たなかつた。それでもたつぷり三十人はいた。

主治医は丑平を診察して、あと二十時間内の生命だろうと言つた。ほかの医者も同意見だつた。

傘下会社の社長や重役たちで緊急會議が持たれた。主宰は俾の幸一がした。

しかし、丑平は老齡だつたし、すでに会長に退いていることでもあるし、彼が死んでもその事業にはあまり影響はなかつた。社業の軌道はすでに出来上がつていた。

ただ、丑平の死によつて東洋鉄鋼が対外的に威信を減ずることはたしかだつた。何といつても彼は創業者であり、独裁実力者であり、「菅沼丑平の東洋鉄鋼」であつた。彼の死は、その事業全体の色を褪せさせるに十分だつた。

たとえば、銀行方面の信用である。融資は窮屈になるかもしれない。丑平が計画していた新規事業は全部取りやめるか、延期するほかはなからう。現在、進行中のものも縮小するのが出るだろう。とにかく、今後は堅実方針で貫くことで意見は一致した。

丑平の死によつて、東洋鉄鋼はプラスの面もある。

丑平は、もう一つの新興製鉄会社と絶えず競争してきた。その相手とは、はじめのうちはそれほど衝突もなかつたが、両方の附帯事業から、まず競争が起つた。次には北海

道におけるコールド・ストリップ・ミルの新設工場の申請競争となった。さらに設備投資の拡張競争と無限にひろがった。それには、多くの場合丑平と対手社長との面子の競いがかかっていた。

丑平の晩年は、その競争相手にいかに勝つかの執念に燃やされた。彼の事業における着想も計画も、すべてそこにかかっていたといっても過言ではない。そのために企業はいよいよ派手にひろがった。なかには損益を度外視した事業もずいぶんあった。すべては制覇のためである。ワンマンだから、制める者がなかった。側近重役はほとんどお茶坊主である。

丑平が死ねばそういう出血をとめることができる。実際、このままでは東洋鉄鋼も危殆に瀕しないとも限らなかった。整理が必要であった。しかし、丑平の息のある間は不可能だった。

その夜の緊急役員会は、だから、あまり暗いものではなかった。丑平の大軒が聞えている広間では、内輪の会議を了えたあと、重役たちは、死期迫った丑平を思っていた。

——会長も最後まで仕合せな人だね。思うままにやりたことは、いっぱいやって、おまけに裸の美女たちに按摩されながら倒れたのだから。

——全く、極楽死と同じだね。

容態が変わったのは、翌日の朝七時ごろだった。

今まで軒をかいていた丑平が、ふいと眼をさまして、自分をのぞきこんでいるたくさんの顔を順々に見回した。ほとんど奇蹟に近い現象であった。

丑平は伴の顔も、他家にとつがせている娘たちの顔も、重役たちの顔も認識したようだったが、それには少しも瞳をとめずに、恰も誰かの顔を探し求めているように眼を動かしていた。

居ならぶ人々は顔を見合せた。瀕死の会長が誰かを探し求めている。すぐに浮んだのは、会長の愛人たちのことだった。彼女らはひとりもここに来ていなかった。

人情である。会長は彼女らに遇いたがっている。会わせてやりたい。彼女たちも死際の会長を一目でも見たいに違いなかった。

しかし、東京に連絡しても、間に合うかどうか。

それと、夫人は死んで、居ないが、やはり息子の社長に遠慮して、それを言い出す者はいなかった。

会長は、やはり眼をきよきよと動かししていた。危篤の人とは思われない。よほどの執念であった。

伴の社長が、老父の会長の口に耳を持っていた。よく聞きとれなかった。

会長は、息子の掌に指で字を書いた。二度や、三度では分らなかった。しかし、それがやっと分ると、息子の社長は急に怖い顔をして緊張をみせた——。

指の謎

東洋鉄鋼株式会社取締役会長、菅沼丑平は、その翌未明に息を引取った。

遺体はすぐさま伊東の別荘から車で東京の本宅に運ばれた。

翌晩は内輪だけの通夜。その次の晩は一般の客の通夜であった。告別式は青山斎場で、その翌日に執り行なわれる。丑平の死は、新聞にかなり大きく報じられた。一代で東洋鉄鋼を興し、今日の隆盛を築き上げただけに、まさに個人的には立志伝中の人物、公的にも傑物であった。新聞も財界名士の追悼談を載せた。その営業方針には世間にとかくの評があったが、とにかく経営家として稀にみる才能だったと称讃していた。

また、なかには、今後の東洋鉄鋼の行きかたとして、普通なら会長の死によって経営方針が変わるということはないが、東洋鉄鋼の場合、丑平会長の特殊な立場から、彼の死は今後同社に大きな方向転換をもたらすのではないか、という意見も見えていた。

内輪の通夜では夫人が居ないので、息子の社長幸一夫妻が唯一の遺族であった。むろん、幸一の子供や親戚筋は大勢詰めかけた。それに、東洋鉄鋼のおもだった重役はほとんど顔をそろえた。

老会長の死は、それほど遺族に悲嘆を与えなかった。むしろ幸一社長の顔には仄かに明るいものさえ出ていた。

丑平は取締役会長に退いても、実権は全部彼が握っていたのだ。息子の幸一は社長という名目だけで、何一つ彼の権限で決断は許されなかった。人事の面でも、丑平会長が生きている間、部課長クラスでさえ社長の意のままに動かすことが出来なかったのだ。まして重役陣の更迭など思いもよらない。

もっとも、丑平についていた腹心の重役たちも、自然といつの間にか社長のほうに心を通わせるものもあった。この立場はなかなか微妙である。家臣は常に目立たない程度に次代の主に忠勤を寄せるものである。

重役どもは、丑平会長の機嫌を取りながら社長の意を迎えるという神経質な芸当を演じなければならなかった。

そんなことで、幸一社長にとっては、丑平会長の死は頭にかぶさっていた重苦しい笠が除けたようなものだった。彼は丑平が息をひきとった瞬間、自由の空気を肺の底まで吸いこみ、肩の上下運動をした。

近親者による通夜の前日だから、丑平会長の遺体が田園調布の自邸に帰ったときであった。内村常務が白髪頭を幸一社長の耳もとに寄せて、何ごとかささやいた。

幸一は聞いていたが、眉を寄せると激しく常務に首を振った。その勢いに、老常務はおどろいて遁げた。

常務の内村豊吉は七十四歳である。丑平会長と同年であ

った。ふしぎではない。内村豊吉は菅沼丑平と同郷で、しかも小学校時代の同級生であった。丑平はそのよしみで、町工場か何かやっていた内村を東洋鉄鋼に入れて役員にしたのだった。

内村常務は別に経営の衝に当らなかつた。彼の役目は、丑平の愛人七人への仕送りとその世話にあった。のみならず、丑平が新しい女を得るときの折衝や、別れるときの交渉や、女との間に起る紛擾の解決や——そういう係であつた。

世馴れている内村はそうした方面の才能だけはあつた。彼は、女たちにいつも同情するふりをするのがうまかつた。それでいて、内村常務には浮いた噂一つなかつた。

「ぼくは、もう、とくにアノほうは駄目になつてゐるんでね。菅沼とは違つてね。菅沼はいまだに一晚でも女無しには寝られないのだ」

内村は、社外の親しい者によくそう言つてゐた。

内村常務が幸一社長に耳打ちしたのは、丑平の七人の女たちに最後の別れを告げさせる打合せを訊いたのだつた。もし、それが聞き入れられるなら、その順序も打合せしたかつたのである。一どきに七人が来ては愁嘆場も滑稽な風景になる。内村常務は苦勞人らしく、そうした配慮を社長に相談したかつたのである。

しかし、幸一社長は一ぺんにそれを拒絶し、険しい顔つきで、その必要はない、と即座に言つた。

内村常務は退却した。社長のその一言から、翌晩の近親者だけの通夜の席にも彼女らと呼ぶことの不可能を彼はさとした。それは、幸一社長が潔癖というよりも、その原因を社長の夫人へ対する遠慮だと内村は取つた。幸一の妻は敬虔なクリスチャンであつた。

最初の通夜は、こうしてほんの近親者だけでいとなまれたが、生前の丑平と彼女たちのことを知つてゐる他の重役も、女たちが一人も最後の別れに呼ばれないというこの「不自然」な現象に少々おどろいたようだつた。会長夫人が生きているならまだそれも分らないことはないが、あれほど大つぱらに公認されてゐた女たちが排斥されたというのはどうしたことであらうか。会長の死の直前の愉しい遊びと比較して、そのあとの寂しさに、こつそり会長の死顔に同情するものもいた。

重役の中には、そのことを内村にひそかに訊くものもいた。

「さあ、ぼくにもよく分らないが、社長は、そういうことを含めて、一切会長からの影響を消してしまいたいのだらうね」

と、内村はむなしそうに答えた。内村自身も会長が亡くなつてしまえば、もはや、この会社から追われることは分明であつた。

もう一つ重役連の中で気にかかることがあつた。伊東の別荘に駆けつけたときだったが、彼らは、臨終間際の丑平

会長が幸一社長の手を握って、その掌に指先で何か字のよ
うなものを書いたのを目撃している。そのとき社長はひど
く厳肅な顔つきをしたが、あの字の意味は一体何だったろ
うか。

「さあ、それはよくにも分らないね」

内村にも疑問であつた。幸一社長だけが知っていること
である。

指の文字のことは、忽ち重役間に重大な関心を惹き起し
た。

なかには、こういう説を唱えるのがある。

「あれは、会長が二号さんのうち一番気にかかる女に財産
分けのことを言い遺したのだ。それよりほかに考えようは
ない。だから、社長はあんなふうに複雑な顔をしたのだ」
「それはだれだろう？」

「お久さんだろうな。会長とは長いつき合ひだし、七人の
愛人のうち一番年が若いし、きれいでもある。会長はず
いぶん彼女を可愛がつていたからね。さぞ心残りだったに
違ひない。だから、自分が死んでしまえば社長はどんな扱
いをするか分らないので、特に社長に遺言したのだ」

と説明するのである。

そのお久説にはだいいぶん賛同者もあつたが、
「いや、そうではない。会長は一番古いお常さんを考えた
のだろう。なぜなら、彼女は一番最初の女だし、年を取つ
ている。やはり彼女が可哀想になつたのだろう」

と、異説を言うものもいた。これらはいずれも理由ある
推定として、また一面には他愛ない興味として受取られ
た。

だが、全く別に、もっと深刻な見方もあつた。

「会長は社長に後事を託すべき人物を言い遺したのだ。会
長はまだまだ長生きするつもりでいたからね。そこまで生
前に言い遺す余裕がなかった。会長の頭の中は二号さんな
ど問題ではない。ただ会社の経営あるのみだ。これは会長
の執念だよ。だから、自分が最も信頼する人物を社長の掌
に書いたのさ。なにしろ、当人は口が利けないから、それ
だけでもやつとさ。だから、医者もおどろくほど、あんな
奇蹟的なことが出来たのさ。すべてこれ、事業に対する執
念の塊りだよ」

と、分りきつたように言うものもいた。

そうなると、一体、それはだれだろうということになる。
現在の専務だろうか。それとも平役員の中に該当者がある
のだろうか。もし、そうだとすれば、早晚役員陣の入れ替
えのとき、その人が専務となるだろう。これは深刻な問題
であつた。

現在の役員陣のほとんどは会長の独断で決められていた。
完全に社長の時代となれば、当然、それには更迭が行なわ
れる。だがが実力専務になるかということとは、同時に、だ
れがこの役員から追放されるかということにつながつてい
た。

前二説とは違って、もっと人間的な観察もあった。それは、会長が息子の掌に書いたのは、

(オレハ、シニタクナイ)

であつたのだろうと觀察するのである。しかし、危篤状態の人間にそんな長い文章が書けるわけではない。

實際、丑平会長の死は唐突であつた。彼は贅沢な浴場で裸身の美女たちに囲まれて脳の障害を起した。医者は、湯にお入りになっているのが少々長かったですな、と言つたという。会長は愉しい入浴に思わず長湯をし、簡単に言えはのぼせたのである。

それであるから、とてもものに彼は自身が死ぬとは思つていなかった。だが、刻々と迫る死期を、やがては彼も自覚しなければならなくなつた。死にたくない。何としても生きたい。生きて東洋鉄鋼をもっと盛大にしなければならぬ。いや、絶えず競争してきた相手会社を打負かさなければならぬ。まだまだ死んでなるものか。むろん、そうした事業への執念のほかには私生活の愉しみも入っているだろうがね。——そういう見方であつた。

さまざまな臆測は、どうしても外にひろがる。そのことは重役たちの口から洩れはじめた。社員よりも先に外部の財界人が知り、業界紙の記者が探知した。

業界紙の記者は不謹慎にも、一般通夜の席で幸一社長にそのことを問ひだした。

「そんな事実には絶対にありません。あれは会長が私の手を

握っただけです」

社長は渋い顔をして強く否定した。当然の返事である。この一般通夜には弔問客だけでも二百人を越した。

いよいよ告別式だつた。青山斎場には長々と受付がしつらえられ、弔問客がその前にむらがつた。交通巡查数名が二丁ほど先から車の整理に当らなければならぬほどだつた。むろんのこと、斎場の駐車場には豪華な外車の殺到である。十名の整理係は血眼になつた。

正面の菊花に囲まれた丑平会長の大きな遺影の前には、財界の一流人物が次々と弔辞を読んだ。彼が生前、日本の基幹産業に貢献したという理由で、死後の叙勲も伝達された。傘下の主要会社の社員の参列だけでも既に五百人を越えた。これに他の参列者を加えると、三千人という盛大さだつた。

もっともこれは故丑平氏の偉業やその人格を追慕するために集まつたのではない。幸一社長や東洋鉄鋼への功利的な礼儀からである。その証拠に他の二千五百人は同社の関連会社や下請会社やそのまた下請業者たちの社員や従業員によつて占められた。あとの受益関係や義理関係がなかったら、葬儀は寂寥たるものである。遺骨は自邸に持ち帰られても、続々と弔問客はあとを絶たなかつた。社長も夫人もくたくたになつた。普通なら、このままでは初七日まで身体がもたないくらいだつた。

「社長、少しお休みになつては？」